日々の聖句

６月　聖霊（二）

聖霊よ。来てください。あなたを信じる者の心を満たし、あなたへの愛の心をかきたててください。
あなたの御霊を送ってください。そうすればそれらは造られ、あなたは地の面を新しくされます。
神よ。あなたは聖霊の光によって信仰者の心に教えを与えてくださいました。同じ聖霊によって、私たちを本当に知恵ある者とし、聖霊の慰めを喜ぶことができるようにしてください。私たちの主、キリストによって、アーメン。

Come Holy Spirit, fill the hearts of your faithful and kindle in them the fire of your love. Send forth your Spirit and they shall be created. And You shall renew the face of the earth.
O, God, who by the light of the Holy Spirit, did instruct the hearts of the faithful, grant that by the same Holy Spirit we may be truly wise and ever enjoy His consolations, Through Christ Our Lord, Amen.

はじめに

通常、「黙想の手引」というと、信仰者の神への態度を問うものが多いのですが、この手引は、先月に続いて「聖霊」という主題、つまり教理を追いながら、御言葉を読むように構成されています。

聖書を読む目的のひとつは、「人は神のために何をすべきか」（倫理）を知るためなのですが、私たちは「神が人のために何をしてくださったか」（教理）を知ることによって、はじめて、それを正しく理解し、教えられていることを実行することができるようになります。

聖書は日常生活に適用されなければ意味がありませんが、それをあまりに急ぎすぎると、聖書を「こんな時はこうしよう」という「ハウ・ツー」の本として読むだけで終わってしまいます。聖書を自分の生活に役立てるために読むというよりは、生活が聖書に沿ったものへと変えられていくために読む。それが「黙想」という読み方です。神が私のために何をしてくださったかを深く想い見ることによって、ほんとうの意味で、今日の一日をどう生きるかという指針と、そのための力を得たいと思います。

この手引では、「新改訳２０１７」から聖句を引用してありますが、ご自分の慣れ親しんでいる訳を使って差し支えありません。

次月は「聖化」（きよめ）の主題で御言葉を読みます。この手引を続けてお使いください。

二〇一九年六月

中尾フィリップ

『日々の聖句』の使い方

この冊子は聖書を読み、学び、黙想するための手引で、独立した読み物ではありません。かならず、聖書を開いてその日の箇所を読み、参照箇所も開くようにしてください。

聖書の黙想には、古代から「レクシオ・デヴィナ」という方法が用いられました。それは次の四つの段階を進んで聖書を読む方法です。

一、読　む　心を静めてゆっくりと、何回でも、聖書を読みます。聖書は、神の言葉ですから、神が語っておられる声を聞くようにして読みます。

二、黙想する　黙想は聖書との対話です。聖書になぜこのような言葉が書かれているのだろうか。それが自分にとってどんな意味があるのか、聖書に問い、聖書に答えてもらうようにして、その箇所の中心的な部分を思い巡らします。

三、祈　る　この祈りは、黙想によって得られたことに対する応答の祈りです。それは悔い改めや行動に結びつく決心であるかもしれません。あるいは、まだ解けなかった疑問や解決していないことがらに対するさらなる求めであるかもしれません。それがどんなものであっても、正直に祈ることが大切です。

四、瞑想する　祈りに続いて、しばらくの間、神とのまじわりに留まりましょう。「黙想」は「聖書との対話」ですが、「瞑想」は「神との対話」です。神の臨在の中にとどまることによって、御言葉が血肉となり、祈りが生活の中で実現していきます。「瞑想する」ことは神とのまじわりに「留まる」こと、自分自身を神の手に「委ねる」ことと言い換えることもできます。

しかし、聖霊があなたがたの上に臨むとき、あなたがたは力を受けます。そして、エルサレムユダヤとサマリアの全土、さらに地の果てまでわたしの証人となります。（8）

イエスは昇天を前に、ペンテコステを予告して、弟子たちに「父の約束を待ちなさい」（4）と命じました。聖霊が降ることは、救い主が世に来ることと同様に、旧約時代から父なる神によって約束されていたことだったからです。イエスはまた、ヨハネの水によるバプテスマと比較し、ペンテコステには「聖霊によるバプテスマ」を授けられるとも言われました（5）。ヨハネが預言した「聖霊によるバプテスマ」がペンテコステに成就したのです。

弟子たちはエルサレムを中心としたイスラエルの再興を期待していましたが、イエスはむしろ、エルサレムから「地の果て」までも神の国が広がっていくのだと答えました。そして、そのために弟子たちは「キリストの証人」になるのです。聖霊は「キリストの証人」を生み、育て、力づけるお方です。

「キリストの証人」になるには、聖書の知識を持ち、コミュニュケーションの技術を磨けば良いというものではありません。「証人」という言葉の原語は「殉教者」という意味でも用いられます。「私のために命をささげたキリストに、私も自らをささげる。」聖霊によって、そのようなキリストへの愛と献身へ導かれてはじめて、私たちは「キリストの証人」になることができるのです。

祈り　聖霊よ。私を本物の「キリストの証人」としてください。そうすれば、キリストを証しすることができるようになります。

悔い改めて、イエス・キリストの名によってバプテスマを受けなさい。そうすれば、賜物として聖霊を受けます。（38）

ペテロは「神が今や主ともキリストともされたこのイエスを、あなたがたは十字架につけたのです」（36）と言って、人々の罪を指摘しました。人々はこの言葉に「心を刺され」、「兄弟たち、私たちはどうしたらよいでしょうか」と問いました（27）。「罪について、義について、さばきについて、世の誤りを明らかにする」聖霊が（ヨハネ16・8）働き、救いを求める心が起ったのです。

ペテロの答えは「悔い改めて、バプテスマを受けなさい」でした。バプテスマには、自分の罪を悔い改め、その赦しを願い、救い主であり、主であるイエス・キリストを信じ、このお方に従うことが含まれています。ここでの「バプテスマ」はそれらを含んだバプテスマです。

そして、すべて悔い改めてバプテスマを受ける者には聖霊が約束されています。その約束はペンテコステから後のすべての時代に、また、どの国のどの民族にも与えられています（39）。今日の私たちも約束通りに聖霊を賜わるのです。ですから、父と子と聖霊の名によるバプテスマは、もはや「水のバプテスマ」ではなく、「聖霊のバプテスマ」と言ってよいのです。バプテスマの時に聖霊を受けた確信を持てなかった人でも、その後の信仰生活を忠実に励むなら、やがて、聖霊が自分の内に働いて、自分を生かしていることが分かり、聖霊を受けていることを確信できるようになります。

祈り　聖霊よ。あなたが私のうちにおられることが分かり、確信できるようにしてください。

なぜあなたがたは、心を合わせて主の御霊を試みたのか。（9）

キリスト者となったためユダヤ社会から追放され、生活が成り立たなくなった人々が、エルサレムには大勢いました。それで、地所や家を所有している者たちはそれを売り、彼らを支えました。教会は、信仰ばかりでなく、財産をも共有する共同体となりました。アナニアとサッピラも土地を売って、その代金の「一部」を使徒たちのところに持ってきました。ところが、彼らはそれを代金の「全部」であると偽ったのです。大きな財産を献げるときには、祈りが、しかも、夫婦が心を合わせての祈りが必要です。なのに、この夫婦は心を合わせて祈るどころか、心を合わせて偽りごとをしたのです。信仰者の夫婦であれば、一方が信仰に背くようなことをしようとしたら、それを諌めるべきです。しかし、この夫婦はそれをしなかったのです。献金という信仰の行為に虚栄と偽りを持ち込んでしまいました。それは聖霊を欺き（3）、試みる（9）行為でした。そのため、この夫婦はその場で息絶えてしまいました。

このことは聖霊の働きが誰の目にも明らかに見られた初代教会で起こりました。そんな環境の中でも、聖霊を受けたキリスト者が、聖霊を欺き、試みる罪を犯す可能性があるのです。いや、聖霊を受けているからこそ、聖霊に対する罪が生まれるのです。聖霊を受けていることが、どんなに大きな恵みであるかを知る者は、同時に、聖霊との正しい関係を保つ責任を負っているのです。この厳粛な事実をしっかりと心に留めていましょう。

祈り　聖霊よ。あなたは真理の御霊です。私たちのうちから偽りと欺きを取り除いてください。

あなたがたの中から、御霊と知恵に満ちた、評判の良い人たちを七人選びなさい。（3）

初代教会は寡婦の福祉に心を砕きました。それは、イスラエルに繰り返し教えられてきたことで（出エジプト記22・22、詩篇68・5、イザヤ1・17等）、教会はこの伝統を引き継ぎました（ヤコブ1・27）。教会には「やもめの名簿」（第一テモテ5・9）があったほどです。

エルサレム教会でも、やもめへの日々の配給が行われていたのですが、そのことで苦情が持ち上がりました。使徒たちはその解決を七人の働き人に任せることにし、その七人には「御霊と知恵に満ちた、評判の良い人たち」という条件をつけました。5節では実際に選ばれた人たちは「信仰と聖霊に満ちた人」と言われています。七人の職務は「食卓のこと」（2）でしたから、実務的なことをこなせれば、誰でも良かったと思われがちですが、「聖霊に満ちた人」であることが求められました。なぜなら、教会での働きは、どんな種類の働きであっても、教会に調和と一致をもたらし、主のからだである教会を建てあげ、神の言葉が宣べ伝えられるための奉仕であるからです。

この「七人」は後の「執事」の原型だと言われますが、執事には「信仰の奥義を保っている人」（第一テモテ3・9）であることが求められています。「執事」のもともとの意味は「仕える者」「奉仕する者」です。執事に求められる資質は教会で奉仕するすべての人にも求められています。「信仰と聖霊に満ちた人」でなければ、本当の意味で奉仕を果たすことはできないのです。

祈り　聖霊よ。奉仕を全うすることができるために、私たちを満たしてください。

こうして、教会は…主を恐れ、聖霊に励まされて前進し続け、信者の数が増えていった。（31）

使徒の働きには「こうして、神のことばは…」あるいは「こうして、教会は…」という言葉が幾度がか現われます。最初は使徒6・7で、エルサレム教会について「こうして、神のことばはますます広まっていき、エルサレムで弟子の数が非常に増えていった」とあります。

次は使徒9・31です。教会がユダヤとサマリアに広がったのは、迫害が起こり、信者が散らされたからでした（使徒8・1）。そうであるのに、使徒9・31は、「教会は…平安を得た」と言っています。この平安は「主への恐れ」と「聖霊の励まし」から来るもので、それによって、教会は迫害の中でも「前進」し「増加」していったのです。

三番目は使徒12・24で、「こうして」という言葉はありませんが、「神のことばはますます盛んになり、広まっていった」とあります。

四番目は使徒16・5で、異邦人伝道が確立した後のことが、「こうして諸教会は信仰を強められ人数も日ごとに増えていった」と書かれています。

最後は使徒19・20で、「こうして、主のことばは力強く広まり、勢いを得ていった」とあります。

こうした箇所からわかることは、教会の前進は御言葉の前進であることです。御言葉が広がり、御言葉に生かされ、御言葉に従う人々が教会に増し加えられ、教会は前進しました。そして、それは聖霊の働きによることでした。この時代の教会もまた、「聖霊に励まされて前進し続ける」よう熱く祈ろうではありませんか。

祈り　聖霊よ。あなたの励ましを得て教会が前進し、御言葉が力強く語られ、広がりますように。

聖霊が初めに私たちの上に下ったのと同じように、彼らの上に下ったのです。（15）

ペテロは、異邦人であるコルネリウスにバプテスマを授け、その家に滞在したことについて、弁明を求められました。ユダヤ人が異邦人と寝食を共にすることを非難する人たちがいたからです。しかし、ペテロがペンテコステの日と同じように聖霊が異邦人にも降ったことを証しした時、人々は異邦人もまた同じ福音で救われることを知って神を誉め称えました。

福音は地の果てまで広がっていくべきものですが、ユダヤ人とサマリア人の間に、そしてユダヤ人と異邦人の間には大きな障壁がありました。それで聖霊はサマリアの人々にも（使徒8・15〜17）、異邦人にも（使徒10・44〜47）、ペンテコステの日と同じようなしるしをもって臨み、そうした障壁を取り除き、そのことを目に見えるように示してくださったのです。

同じことはエペソでバプテスマのヨハネの弟子たちに聖霊が降ったときにも起こりました（使徒19・2〜6）。ヨハネの弟子もまた、福音を聞いて、聖霊によって、ひとつのキリストのからだに加えられました。聖霊は、人種、歴史、伝統の違いを乗り越えて信仰者をひとつにしてくださるのです。ペテロは「今あなたがたが目にし、耳にしている聖霊を注いでくださった」（使徒2・33）と言っています。今日も「目にし、耳にする」ことができるような聖霊の働きが起こされ、悔い改めと回心、和解と一致、リバイバルと宣教の拡大などの結果が見られるよう祈りましょう。

祈り　聖霊よ。この時代にも、人々が見て、聞くことのできる、大いなる御業を現してください。

わたしのためにバルナバとサウロを聖別して、わたしが召した働きに就かせなさい。（2）

アンティオケアの教会は初代教会の歴史の中で重要な役割りを果たしています。ここからバルナバとサウロが宣教師として遣わされ、アンティオケアの教会は、宣教師を派遣した最初の教会になりました。

バルナバとサウロの派遣は、礼拝と断食の中で、聖霊によってなされました。「聖霊が…言われた」と記されていますが、聖霊の語りかけが、誰に対して、どのようになされたのかについて、具体的には書かれていません。アンティオケアの教会には「預言者」と呼ばれる人がいましたから、その人の口を通してかも知れません。また、バルナバとサウロによる宣教旅行の計画はすでに教会内で話し合われていたことなのかも知れません。その場合、聖霊は人々の一致や合意の中に働き、それを通して人々に語りかけたのでしょう。

いずれにせよ、教会は、みずからの計画によってでなく、なすべきことを神に問い、その答えを聖霊によって受けとって行動しています。しかもそれは断食を伴う真剣な祈りを通してです。

教会においても、資料を集め、様々な立場から検討し、予算を立て、手順を踏んで物事を決定していくのは良いことです。しかし、祈りのうちに聖霊の声を聞くことを忘れてはなりません。バルナバとサウロは「聖霊によって送り出され」たからこそ実りある働きをすることができました。聖霊によらないものは、人を喜ばせるだけで、神のために実を結ばないのです。

祈り　聖霊よ。あなたに送り出されて主の働きにあずかることができますよう、導いてください。

聖霊と私たちは、次の必要なことのほかには、あなたがたに、それ以上のどんな重荷も負わせないことを決めました。（8）

使徒15章の会議は、49年頃ころ行われ、「エルサレム会議」と呼ばれ、最初の教会会議となりました。このときの議題は「異邦人キリスト者にモーセの律法を守る必要があるかどうか」というものでした。ペテロはコルネリウスに伝道したときのことを証言し、「神は、私たちに与えられたのと同じように、異邦人にも聖霊を与えて、…私たちと彼らの間に何の差別もつけず、彼らの心を信仰によってきよめてくださったのです」（使徒15・8〜9）と言って、聖霊が異邦人にも与えられたことを根拠に、異邦人に律法の重荷を負わせるべきではないと主張しました。

宣教旅行から帰ったばかりのバルナバとパウロも、異邦人の回心について証しをしました。聖霊がバルナバとパウロをアンティオケアから送り出したのは、この時に証しをさせるためであったかもしれません。

決議文が採択され、それが諸教会に送られることになりましたが、そこには「聖霊と私たちは…決めました」と書かれました。エルサレム会議では、主張と主張のぶつかり合いや、妥協、あるいは多数決によって物事が決められたのではなく、聖霊のみわざが証しされ、聖霊による一致が形作られたのです。教会にはさまざまな会議の場がありますが、「私たちは…決めました」という決議ではなく、常に「聖霊と私たちは…決めました」ということができる決議へと導かれたいと思います。

祈り　聖霊よ。私たちのすべての話し合いを、あなたによる一致へと導いてください。

彼らは、アジアでみことばを語ることを聖霊によって禁じられた…（6）

パウロは二回目の宣教旅行をシラスと共に出発し、リステラで一行にテモテを加えました。一行はアジア（今日のトルコ）に向かおうとするのですが、聖霊によって禁じられました。聖霊は、人を宣教に送り出すお方であるのに、このときは、一行の前進を阻み、彼らを引き戻したのです。しかし、それには理由がありました。聖霊は、パウロたちをアジアからヨーロッパへと導こうとしていたのです。パウロは聖霊に導かれ、ピリピ、テサロニケ、ベレア、アテネ、コリントなど、ギリシャの文化とローマの経済の中心地で伝道することになりました。

聖霊がひとつの道を禁じたからといって、それはすべての道が塞がれたということではありません。そこには必ず別の道が開かれていきます。

黙示録にこう書かれています。「聖なる方、真実な方、ダビデの鍵を持っている方、彼が開くとだれも閉じることがなく、彼が閉じると、だれも開くことがない。その方がこう言われる――。わたしはあなたの行いを知っている。見よ。わたしは、だれも閉じることができない門を、あなたの前に開いておいた。」（黙示録3・7〜8）たとえ、すべての道が塞がれ、門が閉ざされたように見えても、主のために働きたいと真実に願う者のためには、聖霊は「働きのための広い門」（第一コリント16・8新改訳第二版）を開いていてくださいます。その開かれた門を聖霊によって示していただきましょう。

祈り　聖霊よ。多くの人の救いのために、宣教の門戸を大きく開いてください。

神がご自分の血をもって買い取られた神の教会を牧させるために、聖霊はあなたがたを群れの監督にお立てになったのです。（28）

教会の組織には大きく分けて、監督制、長老制、会衆制があります。監督制では地域の諸教会の上に立てられた監督によって、長老制では各教会で立てられた長老によって、会衆制では会衆の合意によって教会が治められます。

後に「監督」は「司教」、「長老」は「司祭」と呼ばれるようになりましたが、聖書が書かれた時代には「監督」と「長老」の間に厳密な区別がなかったようです。きょうの箇所ではエペソに集まった「長老」たち（使徒20・17）に対して、パウロは「監督」と呼んでいます。また、第一テモテ3・2とテトス1・6では「監督」にも「長老」にも同じ資質が求められています。ですから、「長老」は教会の指導者の人格面から、「監督」はその職務面からつけられた名称であると考えることができます。「長老」や「監督」の勤めは、神の教会を「牧する」ことですから、この人たちは「牧者」とも呼ばれました。

どのような制度をとるにせよ、神の民の群れの「牧者」は聖霊によって立てられていることを忘れてはなりません。「会衆制」では、会衆が主体となって牧者を招聘するのですが、その場合でも会衆の祈りや合意を通して働かれるのは聖霊であることを覚えていたいと思います。「牧者」が聖霊によって立てられていることを、牧者自身も、会衆も理解し、聖霊の主権に服従するとき、教会は、はじめて神の民の群れとなるからです。

祈り　聖霊よ。あなたがお立てになった牧者をきよめ、満たし、用いてください。

しかし、もし神の御霊があなたがたのうちに住んでおられるなら、あなたがたは肉のうちにではなく、御霊のうちにいるのです。（9）

キリストを信じ、キリストに従う者は、「弟子」、「仲間」、「聖徒」などと呼ばれましたが、アンティオケアではじめて「クリスチャン」と呼ばれるようになり、今に至っています。聖書で「クリスチャン」という場合、それは、たんにキリスト教に賛同しているとか、教会の会員になっているなどということではなく、「キリストのもの」とされ、キリストに属する者となっているという意味があります。「キリスト者」と訳されるのはそのためです。「わたしはぶどうの木、あなたがたは枝です」（ヨハネ15・5）との言葉にあるように、キリストに結び合わされ、キリストの命によって生かされ、実を結ぶ者が「キリスト者」なのです。

そして、このキリストとの命の結合は、聖霊によってなされます。キリスト者が聖霊のものとなり、聖霊もまたキリスト者のうちに住むという、相互の関係によって、キリスト者は「キリストの者」とされるのです。

イエスは「その日には、わたしが父のうちに、あなたがたがわたしのうちに、そしてわたしがあなたがたのうちにいることが、あなたがたに分かります」（ヨハネ14・20）と言われました。信じる者のうちにキリストがおられ、キリストのうちに信じる者がいるというまじわりが聖霊によって実現し、信じる者は、文字通り「キリストの者」となるのです。

祈り　聖霊よ。私が「キリスト者」であることの意味を教え、そのように歩ませてください。

イエスを死者の中からよみがえらせた方の御霊が、あなたがたのうちに住んでおられるなら…（11）

「バプテスマにおいて、あなたがたはキリストとともに葬られ、また、キリストとともによみがえらされたのです」（コロサイ2・12）とあるように、キリストを信じる者もまた、キリストとともに復活に与っています。信じる者は、キリストの復活によって、「義と認められ」（ローマ4・24、25）、「新しく生まれ」（第一ペテロ1・3）、永遠の命に生きるのです（ローマ6・4）。「終わりの日」の復活は、信仰者の大きな希望ですが、信仰者は世にあってすでに復活の命で生かされているのです。そして、信仰者をキリストの復活に結びつけ、その命で生かしてくださるのが、聖霊です。

聖書は、いたるところで「神がイエスをよみがえらせた」と言っていますが、ローマ8・11では「聖霊がイエスをよみがえらせた」と言っています。信仰者は「イエスをよみがえらせた」お方を内に宿しているのです。このことが分かれば、私たちは他のあらゆる力に打ち勝つことができるという確信を持つことができるようになります。不義の道具となっていた「死ぬべきからだ」が、内にいてくださる聖霊によって生かされます。罪の奴隷ではなく、義の道具となって、神の栄光を現すものとなるのです。神のみこころにかなったことを行い、律法を全うすることができるようになるのです（ローマ6・13、7・4、8・4、第一コリント6・20、ガラテヤ5・18）。これらはすべて聖霊によってなされるのです。

祈り　聖霊よ。あなたの命によって私を生かし、義の道具として用いてください。

あなたがたは、人を再び恐怖に陥れる、奴隷の霊を受けたのではなく、子とする御霊を受けたのです。（15）

ローマ9・4に「彼らはイスラエル人です。子とされることも、栄光も、契約も、律法の授与も、礼拝も、約束も彼らのものです」とあって、旧約の神の民に与えられた特権がいくつも並べられています。その中のひとつ「子とされること」という言葉は、ローマ8・15の「子とする」という言葉と原語では同じで、それには「養子縁組」（adoption）という意味があります。神は、かつてイスラエルを養子とし、新約の時代にはキリスト者を養子として選んでおられます。

養子縁組を行うときには、ふつう、親となる者と子となる者との間に仲介者を立てますが、ローマ8・15では、聖霊を「子とする御霊」と呼んで、養子縁組の仲介者として描いています。キリストの救いには、罪人が義と認められるという立場の変化、罪の性質を持った者がきよめられるという性質の変化、罪の奴隷であった者が神の子どもとされるという身分の変化が含まれています。聖霊はそのどれにも重要な役割を果たしていますが、ここでは神の子どもの身分を与えるお方として描かれているのです。

聖霊は、また、私たちに神の子どもであることの確信を与えるお方でもあります。「神は『アバ父よ』と叫ぶ御子の御霊を、私たちの心に遣わされました」（ガラテヤ4・6）とあるように、聖霊は信仰者に確信と愛をもって神を「父よ」と呼ばせてくださるのです。

祈り　聖霊よ。私はあなたによって神を「父」と呼びます。

私たちは、何をどう祈ったらよいか分からないのですが、御霊ご自身が、ことばにならないうめきをもって、とりなしてくださるのです。（26）

祈りは「父よ」という呼びかけで始まりますが、その第一声を与えてくださるのは聖霊です（ローマ8・15）。しかし、その後、何をどう祈ったらよいのか分からず、祈りがそこで止まってしまうことがあります。祈ることができず、うめくだけのこともあります。そんな時でも、聖霊は私たちのうめきと共にうめいてくださいます。無理に祈ろうとあせる必要はありません。「父よ」と祈ることができたら、それだけでも、祈りになります。かつて、イスラエルの人々は「主よ」と、神の御名を呼んだ後、しばらく沈黙して、「主」がどのようなお方かを思いみてから祈りを続けたと言われています。沈黙を恐れず、私たちの沈黙の中でこそ、とりなし祈ってくださる聖霊に信頼しましょう。

聖書が「聖霊によって祈りなさい」（ユダ1・20）と教えているのは、聖霊がとりなし祈ってくださることを信じて、聖霊と共に、聖霊にはげまされて祈ることだと思います。

エペソ6・18には、「あらゆる祈りと願いによって、どんなときにも御霊によって祈りなさい」という言葉に続いて、「そのために、目を覚ましていて、すべての聖徒のために、忍耐の限りを尽くして祈りなさい」（エペソ6・18）とあります。聖霊が自らのうちにいてとりなし祈ってくださることを知る人は、他の人のために、忍耐をもって、とりなし祈ることができるようになります。とりなしの力は聖霊から来るのです。

祈り　聖霊よ。私に祈る力を与えてください。

兄弟たち。私たちの主イエス・キリストによって、また、御霊の愛によってお願いします。（30）

「御霊の愛」とは何でしょうか。神は愛のお方であり、聖霊は神ですから、聖霊ご自身が愛のお方であることはもちろんですが、同時に、聖霊は神の愛を人に届けるお方、また、人に神の愛を持たせてくださるお方です。ローマ5・5は「私たちに与えられた聖霊によって、神の愛が私たちの心に注がれている」とあり、ガラテヤ5・22に「御霊の実は、愛、喜び、平安…」とあって、聖霊が人の内面に神の愛を注ぎ、愛の実を実らせてくださることが教えられています。「御霊の愛」とは、そのようにして聖霊によって与えられた、人間的なものを超えた愛のことです。

ローマ12・9に「愛には偽りがあってはなりません」とありますが、人は「偽りのない愛」（第二コリント6・6）を持つことができるのでしょうか。生まれつきのままではできません。しかし、聖霊によってそれは可能です。初代教会にはそのような愛を持った人々がいました。パウロは、コロサイの信徒の「御霊による愛」（コロサイ1・8）を感謝しています。

パウロは、近い内にローマに行ってローマの信徒に会いたいと、手紙に書いていますから、パウロとローマの信徒は互いにまだ会っていなかったのです。そうであるのに、ローマ15・30でパウロは、ローマの信徒を信頼して、祈りを要請しています。たとえ人間的に近い関係でなくても、互いの間に「聖霊の愛」があれば、このような美しい人間関係を築くことができるのです。

祈り　聖霊よ。あなたから来る愛で、主にある者たちを結びつけてください。

御霊に属することは御霊によって判断するものだからです。（14）

「神さまについてやキリストについてはある程度分かるが、聖霊のこととなると分からないことばかりだ。」多くの人がそう言います。なぜ聖霊のことが分からないのでしょうか。それは、「御霊に属することは御霊によって判断」されなければならないのに、人間の理性だけで判断しようとするからです。聖霊のことは、聖霊によって教えられなければなりません。聖霊による新生を体験し、聖霊を受け、聖霊に学び、聖霊に信頼し、聖霊によって祈り、聖霊に導かれ、聖霊に満たされてこそ、聖霊が分かるようになるのです。

聖霊については「御霊のことば」によって語ります。この「御霊のことば」は何も、特別な言葉である必要はありません。聖書が日常の言葉を使い、説教が平易な言葉で語られるように、私たちが聖霊について語り合うときも、普通の言葉を使います。しかし、その言葉の単語や文法上の意味が分かっても、その言葉が言おうとしていることは、聖霊に教えられなければ分かりません。たとえば、「聖霊に満たされる」と言う場合、「満たされる」という言葉は普段使っている言葉で、誰もがその意味を知っています。しかし、「聖霊に満たされる」という場合には、コップに水を一杯入れるというのとは違った意味があります。それを理解するには、自らが聖霊の満たしを求める中で、聖霊に教えられる必要があります。聖霊によって教えられることを願い求め、「聖霊のことば」を理解する者となりましょう。

祈り　聖霊よ。私を、あなたに学び、あなたに教えられる者としてください。

兄弟たち。私はあなたがたに、御霊に属する人に対するようには語ることができずに、肉に属する人、キリストにある幼子に対するように語りました。（1）

第一コリント2章から3章にかけて、三種類の人が描かれています。一つは「生まれながらの人」（第一コリント2・14）、二つ目は「肉に属する人」、三つ目が「御霊に属する人」です。

「生まれながらの人」とは、聖霊による新生を体験していない人のことです（ヨハネ3・3）。

「肉に属する人」とは、聖霊による新生を体験してはいても、霊的に成長していない人で、いまだに「肉」、あるいは「古い人」に従ってものを考え、行動している人のことです。この人たちは「キリストにある幼子」とも呼ばれています。この場合「幼子」は、素直で謙虚な人という意味ではなく、「未熟」な者という意味で使われています（第一コリント14・20、ヘブル5・12〜13）。

「御霊に属する人」は一定の霊的な成熟を遂げている人ですが、それは成長の余地のないような成熟ではありません。ガラテヤ6・1に「兄弟たち。もしだれかが何かの過ちに陥っていることが分かったなら、御霊の人であるあなたがたは、柔和な心でその人を正してあげなさい。また、自分自身も誘惑に陥らないように気をつけなさい」とあるように「御霊の人」であってもまだ克服すべきものがあるのです。神が私たちに求めている成熟とは、より神に近づき、キリストに似たものとなり、さらに聖霊に満たされていこうとする意欲を伴った成熟です。

祈り　聖霊よ。私をキリストにある真の成熟へと導いてください。

あなたがたのからだは、あなたがたのうちにおられる、神から受けた聖霊の宮であり、あなたがたはもはや自分自身のものではありません。（19）

第一コリント3・16に「あなたがたは、自分が神の宮であり、神の御霊が自分のうちに住んでおられることを知らないのですか」とあります。「あなたがた」は複数ですが「宮」は単数ですから、ここで「宮」と呼ばれているのは、個々のキリスト者というよりは、教会を指しています（エペソ2・21〜22）。聖霊は教会をご自分の宮としてそこに住まわれるのです。

しかし、同時に、個々のキリスト者もまた聖霊の住いです（第一コリント6・19）。教会がキリストのからだであって、「神の宮」として聖別されなければならないように、個々のキリスト者のからだもまた「聖霊の住い」として聖別されなければなりません。

キリスト者には、聖霊の住いであり、キリストのものであるからだを、不義や不法に用いてはいけないと戒められていますが、そればかりでなく生活のあらゆる面で、自分のからだをもって神の栄光を現すことが求められています（第一コリント6・19、10・31）。

ローマ12・1に「あなたがたのからだを、神に喜ばれる、聖なる生きたささげ物として献げなさい」とありますが、この場合の「からだ」は、単に手や足といった肢体だけでなく、「からだを持った霊」としての人間の存在、その生活と人生を意味しています。聖霊は信仰者の存在のすべてを通して神の栄光を現そうとしているのです。

祈り　聖霊よ。私の存在のすべてを通して神の栄光を現してください。

それは、墨によってではなく生ける神の御霊によって、石の板にではなく人の心の板に書き記されたものです。（3）

この箇所では律法によって救われようとする道と、福音によって救われる道とが比較されています。「石の板」は、そこに「十戒」が書かれたことから、「律法」を意味し、「心の板」は「新しい契約」を意味します。そして、この「新しい契約」はエレミヤ31・33に「わたしは、わたしの律法を彼らのただ中に置き、彼らの心にこれを書き記す」とあるように、文字によらず聖霊によって記されるのです（エレミヤ31・33）。

律法によって救われようとする道には、聖霊による命がありません。しかし、福音によって救われる道、「新しい契約」には、聖霊の命があります。それで、「文字は殺し、御霊は生かす」（第二コリント3・6）という言葉が生まれました。使徒パウロは律法の道ではなく、福音の道に仕えていることを誇りとし、コリントの信徒こそ、その働きの実であり、「推薦状」であると言っています。

「文字は殺し、御霊は生かす。」これは、聖霊の語りかけだけを聞けばよいので、文字となった聖書は要らないということではありません。聖書そのものが聖霊の語りかけであり、啓示です。聖霊は私たちを聖書の言葉に導き、それを理解させてくださるお方です。聖霊は聖書を死んだ律法の言葉としてではなく、命を与える言葉として、私たちの心の板に書き込んでくださるのです。

祈り　聖霊よ。私のうちにあなたの言葉を書き込み、誰もがそれを読んで、福音の恵みを知ることができるようにしてください。

主は御霊です。そして、主の御霊がおられるところには自由があります。（17）

ここで「主」と呼ばれるお方は「主イエス・キリスト」です。「主は御霊です」というのは、第一コリント15・45に「『最初の人アダムは生きるものとなった。』しかし、最後のアダムはいのちを与える御霊となりました」とあるのを言い換えたものです。アダムはいのちの息を吹き込まれ、生きたものとなりましたが、イエス・キリストはその復活によって、ご自分だけが生きるのでなく、他を生かすお方となりました。主はその命を聖霊によって信じる者に分け与えてくださるのです。ですから、「主は御霊です」というのは、主イエスが聖霊を通して信じる者のうちに働き、命を与え続けていることを言っています。

律法によっては誰もこの命を体験することはできません。それは福音を信じる信仰を通して働く聖霊によってのみ可能なのです。罪からの自由を与え、束縛なく神に仕えることができるようにしてくださるのは、聖霊です。

聖霊は人を生かすだけでなく、人のうちに働いて人をキリストに似たものへと変えてくださいます。それは、地上にあっては「聖化」、天にあっては「栄化」と呼ばれます。「栄光から栄光へ」（18）と言われているのは、キリスト者の生涯を通して、聖霊により、神の栄光を見、また、その栄光に与ること、栄光の主イエスの来臨のとき、主と同じ姿に変えられ、完全な栄光に入ることを言っています。聖霊によって生かされる道は、栄光への道なのです。

祈り　聖霊よ。私を命と自由と栄光への道に導いてください。

あなたがたが御霊を受けたのは、律法を行ったからですか。それとも信仰をもって聞いたからですか。（2）

私たちはどのようにして聖霊を受けたのでしょう。「信仰をもって聞いたから」です。信仰は福音を聞くことによって生じ、聖霊はイエス・キリストを信じる信仰によって与えられるのです。使徒2章でペテロは福音を語り、それを聞いた人々に「それぞれ罪を赦していただくために、悔い改めて、イエス・キリストの名によってバプテスマを受けなさい。そうすれば、賜物として聖霊を受けます」と語りました。人々は「彼のことばを受け入れ」、「バプテスマを受け」ました（使徒2・41）。福音を聞き、それを信じて聖霊を受ける。それはペンテコステの日から変わりません。

エペソ1・13にこうあります。「このキリストにあって、あなたがたもまた、真理のことば、あなたがたの救いの福音を聞いてそれを信じたことにより、約束の聖霊によって証印を押されました。」とても明快です。ガラテヤ人への手紙は律法と福音、行いと信仰、肉と聖霊について論じていますが、結論として、人は福音を聞き、信仰によって救われ、救われた者に聖霊が与えられると言っています。信仰によって聖霊を受けた者が再び律法の行いに戻っていくことは、「御霊によって始まった」ものを「肉によって完成」させようとすること（3）に他なりません。御霊によって始まった救いのわざは御霊によってしか完成することができないのです。聖霊により、信仰の道を完成を目指して歩み続けましょう。

祈り　聖霊よ。あなたにより信仰の道を全うさせてください。

御霊によって歩みなさい。そうすれば、肉の欲望を満たすことは決してありません。（16）

人は「神のかたち」に造られ、神が持っておられる性質を分け与えられました。しかし、罪のために「神のかたち」を失いました。人が「罪びと」と呼ばれるのは、罪を犯したからだけでなく、罪の性質を持っているからでもあるのです。聖書は、この罪の性質を「肉」と呼んでいます。肉から生まれるものは「淫らな行い、汚れ、好色、偶像礼拝、魔術、敵意、争い、そねみ、憤り、党派心、分裂、分派、ねたみ、泥酔、遊興、そういった類のもの」（ガラテヤ5・19〜21）です。これらは明らかに罪と分かるものですが、「肉」は、人の目には罪とは見えないような形をとって現れることも多くあります。人々はこの世での成功や自己実現を誉め、寛容の精神や自由を推奨し、ストレスの無い生活を求めます。しかし、そこに神の栄光を求め、真理を守り、真の平安を持つことがなければ、それらは聖霊が望むこととは正反対の「肉」のわざでしかないのです。

「聖霊が望むこと」は「愛、喜び、平安、寛容親切、善意、誠実、柔和、自制」（ガラテヤ5・22〜23）です。これは「肉」によっては達成できません。これを「肉」によって達成しようとするので、信仰生活が破綻するのです。聖霊の実は聖霊によってしか結ぶことができないことを認め、自らを聖霊に明け渡し、聖霊に信頼することから聖霊による歩みが始まるのです。「御霊によって生きているのなら、御霊によって進もうではありませんか。」（ガラテヤ5・25）

祈り　聖霊よ。私はあなたによって生かされています。あなたによって歩む者としてください。

約束の聖霊によって証印を押されました。（13）

豊かな国では、商品が行き渡ると、人々は有名「ブランド」の品物を買い求めるようになります。この「ブランド」という言葉は家畜などに押した「焼印」という言葉に由来しています。家畜の皮膚にある「焼印」は、その家畜の所有者を示すもので、「聖霊の証印」は、それを受けた者がキリストのものであることを表します。今日では、焼印のかわりにタグを家畜の耳につけたり、チップを体内に埋め込んだりします。家畜の体内に埋め込まれたチップが、その家畜の所有権を証明するように、信仰者の内にいる聖霊は、その人がキリストのものであることを証しするのです。

私たちがキリストのものであるなら、私たちは神とキリストの手の中に守られています。多くの場合、高級「ブランド」には保証が伴いますが、「聖霊の証印」は、神の守りの「保証」でもあるのです（第二コリント1・22）。それは地上で守られるだけでなく、天で栄光にあずかることの「保証」でもあります（第二コリント5・5）。

古代では、どこの国でも、長子が家督を継ぐのが普通のことでした。同じ子どもでも、相続権のある子どもと、無い子どもとがあったのです。聖書は、聖霊が私たちを相続権のない子どもとしてではなく、相続権を持つ子どもとしてくださったと教えています。私たちの内に与えられた聖霊は「御国を受け継ぐことの保証」（エペソ1・14）です。神の栄光にあずかり、御国を受け継ぐという「生ける望み」（第一ペテロ1・3）は聖霊によって私たちのものなのです。

祈り　聖霊よ。私のうちにあって、「生ける望み」となってください。

このキリストを通して、私たち二つのものが、一つの御霊によって御父に近づくことができるのです。（18）

「二つのもの」というのは、「ユダヤ人」と「異邦人」を指します。両者には大きな隔てがあり、パウロは、しばしばそのことに触れています（ローマ9・4〜5、ガラテヤ2・15、エペソ2・11〜12、ピリピ2・5〜6）。しかし、パウロは、ユダヤ人が異邦人に対して優位な立場にあることを述べたすぐあとで、異邦人もまたユダヤ人と同じ特権にあずかり、ひとつの神の民となったと言っています。おひとりの父が二つの民を持ち、おひとりのキリストが二つのからだを持ち、おひとりの聖霊が二つの宮を持つのは矛盾です。ユダヤ人も異邦人もひとつの民、ひとつのからだ、ひとつの神の住まいとなるのです。「からだは一つ、御霊は一つです。主はひとり、信仰は一つ、バプテスマは一つです。…すべてのものの父である神はただひとり」（エペソ4・4〜6）だからです。

第一コリント12・13には「私たちはみな、ユダヤ人もギリシア人も、奴隷も自由人も、一つの御霊によってバプテスマを受けて、一つのからだとなりました」とあり、「奴隷と自由人」との区別も聖霊によって乗り越えられていることが書かれています。ガラテヤ3・28には男女の性別も、神の民、キリストのからだ、また聖霊の住まいとされるのに、何の支障もないとあります。聖霊によって私たちは共に父なる神に近づき、イエス・キリストに仕えることができるのです。

祈り　聖霊よ。あなたがくださる一致によって、私たちをよりいっそう御父に近づけてください。

また、ぶどう酒に酔ってはいけません。そこには放蕩があるからです。むしろ、御霊に満たされなさい。（18）

聖霊に満たされるとは、酒に酔った時のように我を忘れたような状態になることでしょうか。いいえ、聖書はむしろ、酒に酔って意識のはっきりしない状態になってはいけないと命じています。主の再臨を待ち望むキリスト者には「目を覚まし、身を慎んでいる」（第一テサロニケ5・6〜7）ことが命じられていますが、ここで「目を覚ます」というのは、酒に酔うことなく、しらふでいることを意味します。「酒飲み」でないこと（第一テモテ3・3、8、テトス1・7）は奉仕者に求められる必須条件です。

酒に酔うと意識がはっきりしなくなりますが、聖霊に満たされると、キリスト者としての自覚を持った確かな行動に導かれます。キリスト者にとって大切なことは、主への賛美と父なる神への感謝をささげる「礼拝」（19〜20）と、主を恐れ互いに仕え合う「奉仕」（21）です。「聖霊の満たし」は私たちをそこに導きます。

真実な礼拝と忠実な奉仕は、「聖霊の満たし」なしには出来ませんから、私たちが神への礼拝と他者への奉仕を願い求め、それを「主のみこころが何であるかを悟」って（17）行おうとするとき「聖霊の満たし」が起こるのです。礼拝と奉仕は聖霊の満たしの結果でもあり、手段でもあるのです。私たちは聖霊の満たしによってみこころを行い、みこころを行うことによって、さらに聖霊に満たされていくのです。

祈り　聖霊よ。私を満たしから奉仕へ、奉仕から満たしへと導いてください。

神の御霊によって礼拝し、キリスト・イエスを誇り、肉に頼らない私たちこそ、割礼の者なのです。（3）

「神の御霊によって礼拝し」という言葉は、イエスがサマリアの女に語った、「しかし、まことの礼拝者たちが、御霊と真理によって父を礼拝する時が来ます」（ヨハネ4・23）との言葉を思い起こさせます。これは以前、「しかし、真の礼拝者たちが霊とまことによって父を礼拝する時が来ます」（新改訳第二版）と訳されていました。「霊」と訳されていたところが新しい訳では「御霊」となっています。「霊」を人間の霊ととるか、神の霊、つまり聖霊ととるかの解釈の違いが翻訳に反映されています。

「霊」を人間の霊ととるなら、それは、ローマ12・11に「霊に燃え」と言われているような、熱心で、誠実で、勤勉な態度、また、マリアがイエスの膝もとで御言葉を聞いたようなひたすらな思いを指します。それは、神が礼拝者に求めておられるものであって、この箇所の「霊」を「御霊」と訳したからといって、それが否定されるわけではありません。神を礼拝する心はじつに聖霊によって与えられ、聖霊によって強められるものだからです。信仰の告白、賛美、祈り、悔い改め、そして、御言葉の朗読と解き明かしのすべては聖霊によって神に受け入れられるものとなるのです。

聖霊は父と御子と共に礼拝をお受けになるべきお方ですが、あえて礼拝者たちと共にいて、その礼拝を導き、力づけ、人の霊とともに父と御子への礼拝をささげてくださるのです。

祈り　聖霊よ。私を神が求めておられる真実な礼拝者にしてください。

力と聖霊と強い確信を伴って、あなたがたの間に届いた（5）

福音はどのようにして人々の心に届くのでしょうか。まずは、聞く人に理解できる言語で語られる必要があります。ペンテコステの日にそれぞれの地域の言葉が語られ、新約聖書がその時代の共通語・ギリシャ語で書かれたのはそのためでした。また、それは、人々がすでに知っている事柄を手がかりにして語られる必要があります。イエスの譬話はその良い例です。さらに、それは、人々の心の深い求めに答えるものでなければなりません。しかし、それ以上に大切なことは聖霊の働きです。聖霊の働きがなければ、それがどんなに「コミュニケーションの科学」に則ったものであっても、福音は人を救う神の言葉として伝わらないのです。

使徒パウロは「私たちの福音は、ことばだけでなく、力と聖霊と強い確信を伴って、あなたがたの間に届いた」（5）と言っています。「私たちの福音」という言葉には、パウロ自身がその福音によって救われたという体験が込められています（第一コリント15・3）。パウロはその体験の力と確信をもって福音を語り、聞いた人々も「多くの苦難の中で、聖霊による喜びをもってみことばを受け入れ」ました（6）。語る者と聞く者の両者に聖霊が働き、福音が伝えられました。

効果的なコミュニケーションの工夫は必要です。しかし、「いかに伝えるか」だけに心が奪われ、「何を伝える」かが忘れられ、福音そのものの理解が乏しくなり、さらには、聖霊への信頼が低くなってはならないのです。

祈り　聖霊よ。福音が、常に、あなたによって語られ、聞かれるものでありますように。

神は、私たちが行った義のわざによってではなく、ご自分のあわれみによって、聖霊による再生と刷新の洗いをもって、私たちを救ってくださいました。（5）

「聖霊による再生と刷新の洗い」とはバプテスマを指しています。父と子と聖霊の名によって授けられ、悔い改めと信仰をもって受けるバプテスマには、「古い自分」が死に「新しい私」となって生まれ変わること、罪が赦され、きよめられることがそこに込められています。そして、人を新しく生んでくださるのも、人を罪から洗いきよめてくださるのも聖霊なのです。第一コリント6・11にも、「あなたがたのうちのある人たちは、以前はそのような者でした。しかし、主イエス・キリストの御名と私たちの神の御霊によって、あなたがたは洗われ、聖なる者とされ、義と認められたのです」とあって、聖霊が人を罪から「洗い、きよめる」お方であることが書かれています。

聖書はキリストの血が人を「洗い、きよめる」と言っています。ヘブル9・14に「まして、キリストが傷のないご自分を、とこしえの御霊によって神にお献げになったその血は、どれだけ私たちの良心をきよめて死んだ行いから離れさせ、生ける神に仕える者にすることでしょうか」とある通りです。しかし、全人類のために流されたキリストの血を、信仰を持つひとりひとりに適用して、そのひとりひとりをきよめてくださるのは聖霊です。聖霊は、神と人との間に立ち、祭司的な役割を果たし、神の子羊の犠牲を神に受け入れられ、人に働くものにしてくださるのです。

祈り　聖霊よ。御子の血を私に注ぎ、きよめてください。

神は、私たちのうちに住まわせた御霊を、ねたむほどに慕っておられる。神は、さらに豊かな恵みを与えてくださる。（5〜6）

神はイスラエルを「恋い慕う」（申命記7・7新改訳第二版）ほどに愛してくださいました。神はその愛のゆえに、神の愛を裏切り、また、いったんは神に捨てられたイスラエルを回復してくださるのです。ゼカリヤ8・1〜8はその預言のひとつで、ヤコブ4・5〜6に引用されている言葉は、その預言から来ています。

神の「恋い慕い」、「ねたむほどの」愛は、神が人にお与えになった聖霊への愛に基づいています。御父の御子への愛、また御子の御父への愛は、聖書のいたるところに描かれていますが、聖霊もまた、御父と御子の愛の対象であることを忘れてはなりません。御父と御子は聖霊を世に送り、人の霊のうちに住まわせた後も、聖霊との強い愛の絆を保っています。ですから、聖霊を宿しているキリスト者が神よりも世を愛するとき、聖霊ご自身が悲しむだけでなく、聖霊の与え主である父と御子もまたそれを悲しむのです。

大切にしているものを、心を込めて誰かに贈ったのに、それが拒否されたり、捨てられたり、傷つけられたりしたら、贈り主はどんなに悲しむことでしょうか。それが犠牲を払って与えたものであれば、なお、その悲しみは大きくなります。神の深い悲しみは、神の深く、強い愛を表しています。この神の愛を理解するとき、私たちは、聖霊を受けていることの恵みを深く感謝し、さらに神を愛する者となれるのです。

祈り　聖霊よ。あなたの愛で私を神の愛と強く結びつけてください。

また、サルディスにある教会の御使いに書き送れ。『神の七つの御霊と七つの星を持つ方が、こう言われる。（1）

黙示録では聖霊は「七つの御霊」と呼ばれています。これは聖霊が七人おられるという意味ではありません。「からだは一つ、御霊は一つ」（エペソ4・4）であって、教会はおひとりの聖霊に生かされる一つのからだです。「七つの教会」はひとつの教会の七つの側面を表していると考えることもできます。どの教団、教派、地域教会も、自分はエペソの教会のようではない、ラオディキアの教会のようではないと言うことはできません。七つの教会へのどの賞賛の言葉も、叱責の言葉も、また、約束の言葉も自分たちのものとして受けとめ、キリストの一つのからだとして、悔い改め、信仰に立たなければなりません。

それでも聖霊が「七つの御霊」と呼ばれるのは聖霊が七つの教会のどれにも共にいて、教会を生かし、導いておられることを表すためです。サルディスの教会のように「実は死んでいる」と叱責されている教会をも見捨てず、聖霊は、「死にかけている残りの者」を生かそうとしておられるのです。聖霊は、七つの教会のどれとも共にいてくださるお方、また、教会の七つの弱さのどれをも強めてくださる「七つの御霊」なのです。

黙示録の最後に「御霊と花嫁が言う。『来てください。』」（黙示録22・17）とあります。聖霊は、教会の側に立ち、教会をキリストの花嫁として整えてくださいます。教会に、消えることのない再臨の希望を与えてくださいます。

祈り　聖霊よ。私たちはあなたによって、あなたと共に「主よ。来てください」と叫びます。

Penguin Club のブックレット

目からうろこ ── 日常生活の聖書

ふだん何気なく使っている言葉の中にも聖書の言葉が含まれています。そんな聖書の言葉がどこから来て、どんな意味を持つのかを解説した小冊子です。

讃美歌物語

讃美歌ほど世界中で、多くの人々に、長く歌われてきた歌はありません。この冊子では、古今東西の名曲のいくつかからそのエピソードを紹介しています。

アメリカの祝祭日

アメリカの祝祭日のほとんどがキリスト教に基づいています。それぞれの祝祭日の歴史を知って、キリスト教とアメリカの社会のつながりを理解することができます。

日々の聖句

毎日、聖書の数節を読み、それを黙想するための手引です。聖書の言葉は、月ごとの主題にしたがって聖書全体から選ばれています。聖書の主題別の学びにも適しています。

いずれも、印刷版、 PDF 版、 MOBI 版があります。ご注文は penguinclub.net/order.html から、お問い合わせは、 Penguin Club ホームページの「コンタクト」にあるメール・フォームをご利用ください。

Penguin Club
www.penguinclub.net